

＜教育報告＞

協働を目指したワークショップの課題と可能性 —ワークショップ練習を通じて—

平成14年度合同臨地訓練第1チーム

築瀬有美子, Ben Yatich, 八代樹依, 五月女幸子, 穂積明子, 大森千草, 王美華

The Challenge and Possibility of the Workshop Aiming at Collaboration —Through Training of Workshop—

Yumiko YANASE, Ben YATICH, Kie YASHIRO, Sachiko SAOTOME,
Akiko HOZUMI, Chigusa OMORI, Bika OU

I はじめに

神奈川県平塚市では、2001年3月「平塚市介護予防行動推進指針」を定め、介護予防計画作成を住民との協働を目的としたワークショップによって策定することになった。平塚市はその方法として、平成14年、SOJO-ModelによるPGVM (Participatory Goal Visualizing Method) を導入したワークショップ (以下、PGVM-WS) 練習の機会を持つことになった。そこで住民との協働の一つであるワークショップ (以下、WS) の今後の留意点について検討した。

II 目的

PGVM-WS練習参加者の認識の変化から、課題を明らかにすることで、今後平塚市においてPGVM-WS実施留意点について検討した。

III SOJO-ModelおよびPGVMの概要

SOJO-Modelとは、健康な地域の実現のために、関係者が到達目標を理想とする健康的な地域についてイメージし、それを具体化・確認し、その実現に向けてそれぞれの役割を果たすWSの展開方法である。¹⁾ 話し合いでは、参加者が1グループ5～7名程度に分かれ、健康な住民の暮らしの姿を描き、実現のための条件や方法などについて各グループで話し合いを行い、計画書を作成する。この方法をPGVMという。また、話し合いでは「ファシリテータ」(以下、FT) が参加者の意見を出しやすい雰囲気を作り、発言を活発にさせる役割を果たす。²⁾

指導教官：岩永俊博, 畑栄一 (研修企画部)

山田和子 (公衆衛生看護部)

緒方裕光 (研究情報センター)

IV 調査方法

PGVM-WS練習前に自記式質問調査、練習後に面接聞き取り調査を行った。

1 自記式質問調査

1-1 調査期間：平成14年9月23日～10月1日

1-2 調査対象：PGVM-WS練習に参加予定平塚市職員及び平塚保健福祉事務所職員12名

1-3 方法：PGVM-WS練習実施前に、自記式質問表を配布し、郵送回収した (回収率100%)。

1-4 質問内容：氏名、WSに対するイメージ、WSに対するメリット・デメリット、WSに対する期待

2 聞き取り調査

2-1 実施日：平成14年10月11日

2-2 調査対象：平塚市及び平塚保健福祉事務所の職員10名

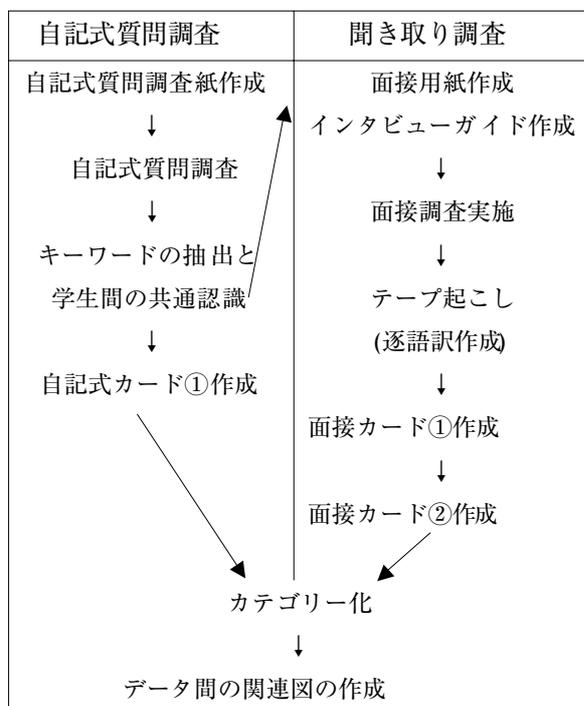
2-3 方法：調査の質を保つため、回収した自記式調査表の回答を調査の目的に照らし、重要発言と思われた部分をキーワード化し、インタビューガイドを作成した。PGVM-WS練習の終了直後に、インタビューガイドに基づいて、参加職員10名に半構造化面接を実施した。調査は対象者が自由に発言できるように、誘導的な質問を控え、対象者の発言をさえぎらないように留意した。対象者の了解を得て録音し、必要に応じて面接用紙に記入した。

2-4 質問内容：WSに対するイメージ、WSに対するメリット・デメリット、WSに対する期待、WSを今後展開していかそうか

V 分析方法

自記式質問調査及び聞き取り調査の結果を分析する際、以下の分析作業を行った (図1)。

図1 分析の流れ



自記式質問調査の結果を分析するにあたり、WSについての特徴、期待される効果、残された課題に注目し、個人別データの文脈を捉えた上でカードに記載し、自記式カード①とした（自記式カード①：72枚）。10名の聞き取り調査の結果は、詳細に書き起こし、発言の文脈を捉えて一文毎にカードに記載し、面接カード①とした（面接カード①：352枚）。更に、面接カード①をもとに、個人毎の聞き取り内容の要旨を、意味のある文章としてまとめ、カードに記載し、面接カード②とした（面接カード②：147枚）。以下に作業の具体例を示す。

Aさんの発言
<p>・先生に、質疑しながら「気負いがあるな」と。みんなもそうなんじゃないかなと。でももしかして主体は住民だから、何故自分がそんなに背負っていたらろうと感じた入り口ですね。</p> <p>・ある程度音頭取りが必要って言う気負いがあったので、次にその時にうやむやに終わったせいで、次から来なくなるんじゃないかという不安を感じた時に、「住民を主体に考えていないから、住民をお客さんとして捉えているからそう思ったのだ」と思いました。</p> <p>・助言で閃いた時に初めて、自分が主体だったんだなと思ってしまうんだけど・・・。</p>

【対象Aさんの場合】

左記の発言は下記のように文章毎の5枚のカードに分けら

Aさんの発言からの面接カード①
先生に質疑しながら、「気負いがあるな」と思いました。
主体は住民だから、なぜ自分は背負っていたらろうと感じた入り口ですね。
ある程度音頭取りが必要という気負いがありました。
うやむやに終わったせいで、次から来なくなるんじゃないかと不安を感じた時に、住民を主体に考えていないから、住民をお客さんとして捉えているからだ」と思いました。
先生の助言で閃いた時に、初めて自分が主体だったんだなと思ってしまうました。

れた。

上記の5枚の面接カード①を要約し、下記の面接カード

面接カード②
住民主体と言いながらも、自分が気負っていたり、自分が主体となっていた気持ちがあったことに気づいた。

②とした。

【個人毎のカードからのカテゴリー化】

以上の手順で作成された個人毎の面接カード②を全員分集め、複数の分析者（本学院学生）が意味のある文章毎に意味内容の類似性を表す新しいカテゴリーを作った。更に、これらの結果について初回分析者と異なる複数の分析者（本学院学生）が、個人的な価値観で結果が歪められないように、互いの合意形成を図りながら、最終的な分析を行った。

個人毎の面接カード②	
Aさん	住民主体と言いながらも、自分が気負っていたり、自分が主体となっていた気持ちがあった事に気づいた。→気づきの場
Bさん	平塚の問題を、行政と住民と一緒に考える場であると思う。→考える場
Cさん	話す場だと思う。→話す場
Dさん	行政が気づかないことを住民に教えてもらう場である。→学びの場

以下に分析作業の具体例を示す。

カテゴリー化
学び・話し合い・気づきの場

以上5名のカード②を一つのカテゴリーとした。

【カテゴリーの関連性の図式化】

面接カード②では、相互に因果が推測されるものや相反する関係が推測されるものの関連性を検討し、関連図（図

ワークショップ実施前のイメージ

ワークショップ実施に対する期待

協働への期待がある

- ・住民と行政が一体となって地域の問題に取り組むきっかけの一つになれば良いと思う。

職員の資質の向上に対する期待

- ・職員が学び、地域の団体育成・リーダー育成ができることを期待している。

地域の活性化に対する期待がある

未体験で分からないものへの期待

- ・初めて扱うのでどんな展開になるか期待している

話し合いの場

- ・同じ場・空気・時間の中で穏やかに語り合うイメージ

ワークショップは場を共有し語り合うものである

負のイメージ

ワークショップ実施への不安

自分がF Tを担うことへの不安

- ・自分にF Tができるか不安
- ・F Tによって成果が変わる不安

潜在する問題が明確化することへの不安

- ・他課の問題も出てくる。受け皿準備への不安
- ・行政で対応できない問題が出ることへの不安

意見が出なかったり・意見の不一致への不安

時間や労力がかかる

人集めや住民への周知・準備が大変

方法論

ワークショップは住民参加の手がかりとして重要である

ワークショップは参加者が共通の認識を持って話し合う

- ・参加者が具体的なテーマを決め、ざっくばらんに話し合うことで漠然とした意識を明確にすることができる

ワークショップは行政が地域の要望や特性を理解、把握して地域に反映させていく方法

- ・参加者の意見をまとめ、返していく。
- ・地域の活動や特色を合致させて展開させていく

型にはまった難しいものではない

正のイメージ

意識の共有を図ることができる

- ・行政と住民・住民同士のコミュニケーションギャップ解消につながる。目的がはっきりする。

住民とスタッフの視野が広がる

- ・職員が具体的な行動を様々な視点から考えられる

参加者に地域を大切にす気持ちが生まれる

色々な人の意見を聞くことで地域の姿が見える

- ・参加者の生の声が聞くことで地域の問題や住民の望む地域の姿が見えてくる。人脈が広がる。

参加者に啓発しやすい

住民のエンパワメントにつながる

- ・マンパワーの育成に有効
- ・地域住民の主体性を引き出すことができ、市民にとって目標ができる。

問題を明確にして解決策を考えられる

□ : カテゴリー

□ : 概念テーマ

図2 ワークショップ前のイメージ図

3)を作成した。なお、分析結果の妥当性を高めるため、質的研究を専門とする研究者との議論を行った。

VI 結果および考察

1 調査対象者の基本属性と人数

表2 分析対象者の基本属性と人数

対象者	10名
性別	男性2名, 女性8名
所属	平塚市9名, 平塚保健福祉事務所1名
職種	事務2名, 保健師7名, 理学療法士1名
行政経験	平均11.2年 (1-30年)

調査対象は、以下のとおりである(表2)。

2 WS練習前の自記式質問調査の結果

2-1 WSのイメージ及びWSの長所と短所

「WSに対する期待」「方法論としての認識」「話し合いの場」「WSは良いとする正イメージ」「不安等の負イメージ」にカテゴリー化した。カテゴリーを構成する概念テーマは以下のとおりである。

WSに対する期待:「協働への期待」「職員の資質の向上に対する期待」「地域の活性化に対する期待」「未体験で分からないものへの期待」

方法論:「WSは住民参加の手がかりとして重要」「参加者が具体的なテーマを決め共通の認識を持って話し合う」「行政が地域の要望や特性を理解、把握して地域に反映させていく方法」「型にはまった難しいものではない」

話し合いの場:「WSは場を共有し語り合うもの」

正イメージ:「意識の共有を図れる」「住民と職員の視野が広がる」「色々な意見を聞くことで地域の姿が見える」「参加者に啓発しやすい」「住民のエンパワメントにつながる」「問題を明確にして解決策を考えられる」

負イメージ:「FTを担うことへの不安」「潜在する問題が明確化することへの不安」「意見が出ないことや意見の不一致への不安」「人集めや住民への周知・準備が大変」「時間や労力を要する」

WS練習前の自記式調査では、対象者の殆どがWS未体験であったため、上記のカテゴリー以外に「分からない」「イメージができない」という意見や、抽象的回答が多かった。また、予めSOJO-ModelやPGVMのテキストを配布したため、その内容を回答した者もいた。

3 WS練習後の聞き取り調査の結果

3-1 WSのイメージ及びWSの長所と短所(図3)

3-1-1 WSのイメージ

「方法論としての認識」「学び・話し合い・気づきの場」「負イメージから正イメージに変化」「正イメージから負イメージに変化」「不安などの負イメージ」にカテゴリー化した。

負イメージから正イメージに変化した背景には、今まで行政主導で実施してきた地域活動が、住民参加型WSを取り入れ実施されることになり、そのことへの不安が考えられる。そして、練習を通して住民と共に実施するWSの良さを知り、住民を交えたWS実施についてイメージが変化したと思われる。一方、正イメージから負イメージへの変化の背景には、WSで色々な意見が聞けると期待していたが、実際は活発な意見が交わせられなかったことが考えられる。しかし「やってみるとやり易い」の意見もあり、この相反する意見は、参加グループ構成やFTの違いによるWSの進行状況、PGVMの受け止め方の相違等により生じたと予想される。負イメージより、WSを実施する行政側の時間・人手・労力等の負担や、住民と一からWSを実施することへの心配、FTとして務まるかという不安、WS運営に対する不安や戸惑いを感じていることが伺われる。

WS練習に参加した職員は、PGVMという新手法に対する受容、行政と住民が一体となった事業展開の必要性を感じたと思われる。しかし一方では、PGVM-WSを地域で展開していくことへの負担や責任に対する心配、PGVMを理解することが難しいという不安を感じていると思われる。

3-1-3 WS練習前と練習後の発言の変化(図3)

「WSのイメージ」と「WSの長所及び短所」の関係、及び各カテゴリーを構成する概念テーマの関係で、相互に因果が関係されるものと互いに反対の関係にあるものを図3に示した。

3-2 参加者のWSへの期待及び課題

表3 WSへの期待

参加者が期待していること
<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民と話し合うことによる視点の広がり ・地域づくりに対する住民・スタッフの意識の変化 ・新しい事業への効果 ・他機関との連携の可能性 ・住民の意見を反映させることができる

3-2-1 参加者が期待していること(表3)

参加者は、住民の声を聞きながら地域に密着した「ボトムアップ形式の事業展開」への期待を持っていると思われる。また、WSにより、介護予防のみではなく他分野の事業や新事業への効果を期待し、保健所や教育機関等様々な機関との連携の可能性を挙げた。これから、今までの事業の進め方を見直し、広い視野で事業を展開したいという職員の意識が伺えた。そして、WSで出された住民意見を施策に反映させたいという、職員の意気込みも感じられた。

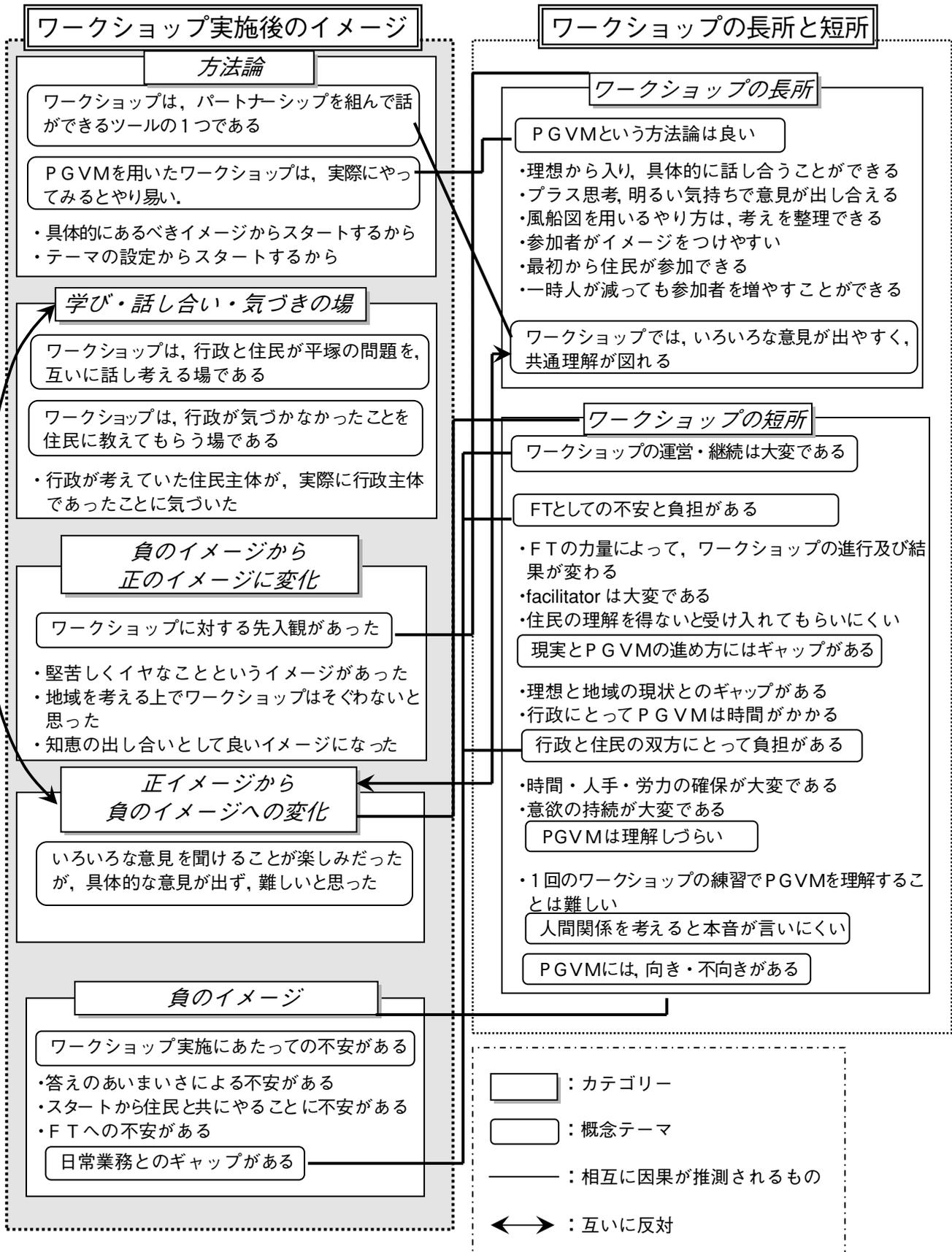


図3 ワークショップ後のイメージ関連図

3-2-2 参加者が課題と感じていること（表4）

表4 WSへの課題

参加者が課題として感じていること
<ul style="list-style-type: none"> ・住民・スタッフ等，参加者の選び方が難しい ・WSの理解を得るためには，説明の工夫が必要 ・職員の意欲や共通理解が求められる ・住民が話しやすい環境づくりが求められる ・住民の意見をどこまで反映させられるか

4 WS実施に向けての提言

4-1 参加者の確保

WSに参加する住民確保は容易ではない現状がある。行政は今まで、住民との交流を地域団体単位で実施してきたが、現在は老人会等の地域団体が減少し、行政と関係を持ち地域に関心をもつ住民が少なくなっている。行政が多様化した住民ニーズに対応するためにも、今後は地域の団体のみではなく、個人単位での参加等も検討する必要があるだろう。

4-2 住民への情報公開

住民がWSの情報を得にくい問題に対しては、WS開催やその内容、進め方、進捗状況などを住民に開示することが大切である。その工夫として、広報やイベント時のコーナー設置、パネルディスカッション等が考えられる。情報発信の工夫が今後大切であると考えられる。

4-3 双方向型の協働

WSで重要なのは、獲得目標を明確にし、参加者が相互理解を深められる作業を繰り返すこと、そして具体的な作業を通して合意を目に見える形にすることとされている³⁾。従って、WSを実際に繰り返しながら、住民と行政の協働作業を通じて合意形成をしていくことが必要であろう。今回、WSは住民と行政とが共に学び、話し合い、気づく場という意見が得られた。これが、行政と住民とが共に実施する「双方向型の協働」⁴⁾によるWSである。行政と住民の協働によるWSは、住民が初めの計画策定段階から関わることが住民の自主性の確保の点から重要とされている⁵⁾。

4-4 職員間の共通理解

職員に対し、WSという新しい試みに対する意欲や職員間の共通理解が求められている。WS運営は職員が実施しなければならず、根気を要する。また職員は多様な住民と、彼らの考え方を理解するという住民に対する意識の変容が求められる。よって、住民に対する理解力・説明力・説得力などを習得する研修制度等も必要であろう。また、参加する専門職員については、他機関や保健事業部署以外の幅広い分野からの選出が必要であり、具体的に施策を推進する際には、関連部局の職員との協力も重要である。

4-5 FTに対する課題

今回の意見の中で、FTとしての不安や負担が多く挙げられた。異なる立場の人々から様々な発言を得られるのはWSの利点である。しかし参加者の社会的属性や地域での立場の違いにより、意見や利害も異なるため、時には意見の衝突も起こりうる。また、発言が特定人に偏る恐れも生じる。従って、FTが住民の発言を偏りなく得られるよう、環境を整えることが必要であろう。今後FTに対する研修を実施し、理解を深めることが必要であると考えられる。

4-6 協働の一手法としてのWS

WSは、「複数の人々が、創造性を発揮し、具体的な作業を通して合意形成を図り、成果物をつくり上げていく集まり」と定義されている。WSは、単なる参加の手法ではなく、参加者一人ひとりの創造性や現実の意志決定過程への参画という目的をもっており、市民自らが協働作業を通じて合意形成するという意味で、市民自治の技術であると考えられている⁶⁾。行政と住民が同じ土俵に立ち、同一の目標に向かって取り組むという姿勢が今求められているのである。

VII まとめ

PGVM - WS練習参加者の認識の変化から、以下の課題を明らかにした。

WSの長所から、「参加者がイメージしやすく、プラス思考で共通理解が図れる」「PGVMは考えを整理し、住民が参加するに当たっても人数の調整が容易である」等の意見が出され、短所からは、「実施するに当たっての負担（運営・継続、時間・労力・人手の確保、意欲の持続）がある」、「現実とPGVMの進め方にギャップがある」「FT・人間関係が大きく影響する」等の意見が出され、WSの課題が明らかになった。WSの練習を通じた意識等の変化から今後の配慮点を検討した。

- WS参加者の決定
- 獲得目標を明確にし、参加者が他者への理解を深めることができる作業を繰り返すこと
- 「形式的な住民参加」ではなく、行政と住民が「協働」の関係を確立することが必要
- 新しい試みに対する意欲や職員間の共通理解が求められる
- 住民に対する理解力・説明力・説得力などを習得する研修制度等も今後必要
- FTが住民の発言を偏りなく得られるよう、環境を整えることが必要
- 住民が委ねることのできる部分とそうでない部分、住民参加によって変えられる部分と変えられない部分を明確にし、出来るところから対応するという姿勢が必要

謝辞

今回の調査を実施するにあたり、本調査にご協力くださいました方々に厚くお礼申し上げます。

文献

引用文献

- 1) 岩永俊博. 地域づくり型保健活動のすすめ. 東京: 医学書院, 1995
- 2) 山下三代子他. 地域づくり型保健活動をもちいた健康づくりの取り組み～台東区谷中地区でのヘルスプロモーションを目指して～. 「専門課程・専攻課程合同臨地訓練」平成13年度報告書, 14-23
- 3) 辻山幸宣編著. 分権時代の自治体職員7住民・行政の協働. 東京: ぎょうせい, 1998
- 4) 3)と同
- 5) 3)と同
- 6) 3)と同

参考文献

- 1) NIRA 研究報告書 no.20010013. 地域問題研究所「まちづくりにみる住民の合意形成システムのあり方」The New approach of forming a consensus for community development in Japan
- 2) 武藤博巳編著. 市民・住民と自治体のパートナーシップ第1巻分権社会と協働. 東京: ぎょうせい, 2001
- 3) 人見剛編著. 市民・住民と自治体のパートナーシップ第2巻協働型の制度づくりと政策形式. 東京: ぎょうせい, 2000
- 4) 山岡義典, 大石田久票編著. 市民・住民と自治体のパートナーシップ第3巻協働型社会のスケッチ. 東京: ぎょうせい, 2001
- 5) 中野民夫著. ワークショップ新しい学びと創造の場. 東京: 岩波書店, 2001
- 6) 平塚市編著. 平塚市介護予防行動推進指針. 2001